

「海やまのあいだ—意識の三層構造—」

講師 元国際日本文化研究センター所長、宗教学者

山折 哲雄氏

1. 海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍

私は京都生活がもう22年になるのですが、故郷は岩手県の花巻という所です。実家のすぐそばに宮沢賢治さんの生家があります。そういうこともありまして、一昨年の3.11の大災害は故郷に発生した災害でしたので、あの後ひと半月後に現地を訪れました。

仙台から入り、松島・石巻、沿岸地域を北上して、気仙沼まで参りました。もうご承知のように、あの惨状を前にして、本当に言葉を失いました。

これは地獄だと、本当に芯から思いました。ところが、誠に皮肉なことに、私が訪れました3日間、空は晴れ上がっており、海がきれいに風いでいました。振り向きますと、美しい山並みがどこまでも稜線を延ばして続いていました。

そこで思ったのです。今、被災地の方々は大変な絶望的な状況に落とされておいでになるにもかかわらず、最終的にはこの美しい穏やかな自然によってしか心の平安を得ることはできないのではないだろうか。そう思いました。日本の自然が持っている二つの素顔です。そのとき私は、「災害列島」「地震列島」「津波列島」とも言われるこの島に生きてきたわれわれの先祖は、そういう災害の中を生きてきた。打ちのめされ、苦しみ、身もだえしながら、しかし生きてきた、そのための心の支えになるような一番重要な恩恵をこの自然がもたらしてくれたのではないのか、そんな感に打たれました。そのことで、かえって一筋の希望のようなものまで、私はその惨憺たる状況の中で感じていたのです。



しかし、ひと月後ですから、周辺には数知れない遺体が横たえられ、埋められておりました。一躰一躰確かめたわけではないのですけれども、その臭いがものすごかった。遺体は腐敗し始めていますし、それにヘドロの臭い、魚の腐った臭いが重なって、全身を押し包んでまいりました。そのご遺体の前にご遺族の方々が立ちつくし、為す術を知らない、呆然とした状況。幾つか、そういう状況に接しました。

確かにあの災害で被災地の方々が見せた、支援の方々が見せた、思いやりの行動、沈着冷静な行動が内外から称賛的になりました。確かにそうではありますが、理不尽に肉親を奪われた方々と、危うく生き残られた方々との間の絆はまだ回復されていない、そういうやり切れない痛切な思いがやはり喉元を突き上げてきました。生きている人間同士の絆は確認されたかもしれないけれども、死んでいった、津波に奪われていった人々とそのあとに生き残ったご遺族との間の、あるいは生き残った第三者としてのわれわれの間の絆は依然として回復されていない。

そう思いましたとき、ふとある歌が浮かんだのです。それは『万葉集』の大神家持という歌人が歌った歌です。ほとんど戦後、口ずさんだことのない歌でした。もうこれは皆さんもご存じの歌ですが、「海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍 大君の辺（へ）にこそ死なめ かへりみはせじ」。海山に屍が打ち上げられ、横たえられ、埋められている、その凄惨な光景がその歌を思い出させてくれたのだろーと思ひます。戦争の記憶と結び付いたこの歌を戦後は誰も歌わなくなった、封印された歌でした。その歌が思い浮かんだ。

そのとき思いましたのは、大神家持と古代の万葉人たちはこの歌を歌い、この歌を口ずさむ中で、恐らく死んでいった人々の魂の行方を信ずることができた。家持はこの歌では「屍」と言う言葉しか使っておりません。しかし、その「屍」という言葉を通して、この世を去った人々の魂が野に憩い、海に鎮まっているということを知ることができたのだと。

今日、果たしてわれわれはそのような万葉人が持っていたであろう人間観、死生観というものをなお持ち続けているであろうかどうか。その死者の魂に対するイメージーションを持つことができないでいるのではないか。そのことによって返って不安に落とされ、現実の事態を受け止めかねている。これは現代日本の問題、近代日本人の問題かもしれない。そう思ったのです。少なくともわれわれの先祖たちは、このような自然観とか人間観を心の底に抱くことによって、わずかにこのような災害を切り抜けることができたのかもしれない、そう思ったのです。

2. 日本人の意識の三層構造

そのとき、あることを思い出したのです。それはもう 30 年ほど前のことなのですが、電通という広告会社がありますが、その電通さんが面白い企画を立てた。それはセスナ機を飛ばして、3000m の上空からこの日本列島の空撮をした映像を作ったのです。沖縄から本土を縦断して北海道まで、宗谷海峡まで、1 時間のビデオに再編集していたのですが、それを見て私はびっくりしました。ほとんどこの列島を取り巻いている光景というのは大海原一色だったからです。それから、飛行機が日本列島に進入した辺りから北海道まで、眼下に見えるのは山また山、森また森、それだけでした。日本列島というのは、教科書によると「稲作農耕社会だ」と書かれているのだけれども、その痕跡片鱗だに見ることができない。「海洋国家だ」というのなら分かります。「山林社会」「森林社会」と言うのならよく分かる。3000m の上空からみるとそうなる。それなのにわれわれは、いったいどうして「日本列島は稲作農耕社会が幸う国である」と教えられてきたのか。

しばらくたって、はっと思いました。これは高さのトリックだと。飛行機を 3000m 上空から 1000m ぐらいまで下降させると何が見えてくるか。それは申すまでもなく関東大平野であり、各地の田園の光景が展開するに違いない。さらに飛行機を降下させて 300m、200m、機首を下げると、今度は大東京、大阪をはじめとする大都市、近代的な工場群が眼下に展開するに違いない。そう思いましたときに、日本列島というのは三層構造で出来上がっている、こう思ったのですね。

それは同時に、日本人の意識が三層構造によって方向付けられているということでもあります。一番の深層に流れているのは森林と山岳、大海原によってはぐくまれた価値観であり、人間観であり、世界観。これは深層に流れている。その上に農業革命以降の農業社会における価値観・人間観・世界観というものが積み重なっている。そして、その上の部分に近代的な価値観、西洋社会から受け取ったさまざまな人間観、世界観が積み重なっている。この三層構造からできている。そう思いましたときに、この災害列島日本においてさまざまな危機的な状況が発生したとき、この列島に生きる人々はその三層に積み重なった価値観・世界観・人間観というものをそれぞれ選択的に取り出して柔軟に対応してきた。そこに日本人の生き方の中に、強紐な自然対応の思想というものが自然にはぐくまれてきたということではないか。ある意味では日本文化の持続力のようなもの、日本人の忍耐の源泉になるようなものが、そこに存在していたかもしれない。そのときそういう思いをしたのです。

その三層構造の日本列島というイメージが心の内にだんだん広がっていく過程であらためて思い起こしたのが、日本列島は75%山と森林に覆われているという地勢学的な条件でした。結局、その山と森に覆われ、その外部に広がる大海原、それに囲まれた狭い領域に畑を作り、田んぼを作り、漁場を作って生き抜いてきた。つまり、海と山の間の狭小な地域を開発し、開拓して、それこそ猫の額のように狭い地域に共同社会を築いて生き続けてきた。われわれの運命というのは、この海と山の間で生きる以外にないという、そういう風土、環境の中で生きてきたのだということが浮かび上がってきたのです。

私はそう思いましたとき、この三層構造と海と山の間で生きる生き方、この二つの条件を背景に生活をしている民族というのが、この地球上にどれほど存在するだろうかと思ったのです。ほとんどありませんよ。とするとそれは、日本列島に固有の風土的条件、歴史的な規定性ではないのか。ちょっと誇張した言い方をいたしますと、そうまで思ったのです。多少似ている所は、例えば北欧3国、カナダの一部。しかし、とても日本のそれとは比較にならない。そういう自然的条件の中で、よくぞここまで近代化・産業化に成功することができたなという思いですね。これはどう考えても、日本列島の可能性である、日本人の希望の一筋の光である、そう思わないわけにはいかなかったのです。

それを前提にして、目を転じて日本海側に向けるとどういう状況が見えてくるのかというのが、今日のこれからの本題であります。

3. 親鸞・蓮如・良寛の海上浄土観をはぐくんだ日本海の落日

私がかねてこの日本海側に旅をするとき、密かに楽しみにしていたことがございます。それは秋田・山形・新潟、そして富山・石川・福井と続く日本海沿岸地域固有の問題ですが、夕日が実に美しいということです。私はそれ以来、乏しい体験ながら世界の各地を旅するとき、その地域における落日の光景を必ず注意して見ることにしています。それで比較する癖が付きまして。日本海沿岸で見る夕日の光景ほど美しい所は、世界広しといえどもどこにもない、そういう確信を次第に持つようになりました。

以前、フランスのパリに2カ月間ぐらい滞在する機会がありまして、ルーブル美術館に通って西洋の人々が落日をどのように芸術化しているか、主に絵画の作品を調べて回ったことがあります。ほとんど落日の光景を描く芸術作品は存在しませんでした。あっても本当に稀に、フランスのバルビゾン派という自然派のグループ、ミレーの「晩鐘」でよく知られている、あのグループの中に多少、落日を描いている絵がないわけではありません

が、それを例外としてほとんどございません。

インドでも見ました、中国大陸でも見ました、アメリカでも夕日の光景は見ました。とてもとても、日本海沿岸地域から眺められるあの荘厳な自然の美しさ、深さを湛える、そういう落日の光景にはお目にかかることはできなかった。これは大変な財産だとだんだん思うようになりました。

そこで歴史を辿りますと、この日本海側における落日に大きく影響されてさまざまな思想的な花が咲いたということにだんだん気付くようになりました。私の乏しい体験から言いますと、4カ所ないし3カ所、あるのですね。一つは新潟なのですから、上越の居多ヶ浜（こたがはま）という、親鸞が京都で念仏の弾圧に遭って、若狭の小浜辺りから舟に乗って流されてきた流罪地、直江津の近くです。二つ目が、同じ本願寺第8代門主蓮如がその伝道の前線拠点に選んだ福井と石川の県境、吉崎、吉崎御坊を建てた所です。それから三つ目が出雲崎の良寛の故郷です。この三つに富山は入っていないのですけれども、しかしこれから先、その問題にも触れていきたいと思います。

実は、親鸞の作品を読んでいますと、至る所に海のイメージが出てくる、「海」の言葉が出てくる。そのことに気づいた。彼の書いた主著に『教行信証』という作品があります。難解な作品ですが、この『教行信証』の序文の第1行目に出てくる言葉が「海」なんです。日本海なのですね。「難思（なんし）の弘誓（ぐぜい）は難度海を度する大船なり」。第1行目に出てくる。「難思の弘誓」というのは阿弥陀如来の救済力、大衆を、万人を救済するというお誓いを立てられた阿弥陀如来のその御誓願というものは、あたかも大きな船が荒海を乗り越えていく、その救いの船、そのものだという文章です。親鸞は居多ヶ浜に約5年間流罪の生活を送ります。朝晩、海鳴りの音を聞き、魚を食べ、そして夕べには日本海の水平線の彼方に沈んでいく落日を見ていた。その体験がこういう言葉を生み出したのだと私は思うようになりました。それは『教行信証』をずっと読んでいくと至る所に海が出てくる。大乘仏教の大乘という代わりに「大乘海」と、海を必ず付ける。衆生・大衆ということを言うときは必ず「衆生海」と海を付ける。人間の欲望を言い表すときに「愛欲の広海」、広い海とこう言っている。どこまで行っても海・海・海ですよ。

「和讃」を晩年に書きますが、その「和讃」の最初からずっと見ていきますと、毎ページ、海が出てきます。これは明らかに親鸞の思想というのは、日本海に面したあの居多ヶ浜で磨かれ、創造されたのだと思う以外にないのですよ。

日本の歴史全体を見ますと、仏教が日本に入ってきてその仏教が日本人に与えた最も重

要な考え方の一つに、浄土、浄土観。人間死んで浄土に往生するという浄土に対する考え方、これ非常に大きな影響を日本人に与えたのです。今日なお、その影響は強く及んでいる。その浄土は山の上にと日本の浄土教徒たちは考えた。インド人はそんなことは考えない。山の中に浄土ありとはインド人は毛頭考えなかった。インド人は西方十万億土の彼方に存在すると考えた。西の方の十万億土というのは一体どのくらいの距離があるのか、誰も答えることはできない無限の彼方ということですね。

ところが日本人は、いや浄土は山の頂上に存在するとそれを読み替えた。これは日本仏教の特徴です。その一つが、富山で言いますと立山です。立山には地獄が描かれており、そういう点でも有名ですが、同時に立山の頂上は浄土そのものです。そういうものを総称して、われわれは先人の説をそのまま受け継いで、日本人における山中浄土という信仰の在り方を重視してきたわけです。もちろん、京都におきましても比叡山が浄土そのものでした。山中浄土であります。

ところが、親鸞は、その山中浄土観というものと並んで、この日本海流罪体験というものを通して海上浄土という考え方を打ち出したのではないのか、私はそう思うようになりました。日本海という世界が持っている文化的宗教的な重要な意味がそこにあるだろうと私は思っているのです。

2番目が蓮如です。親鸞は13世紀の人で、宗教改革をリードした人間ですが、本願寺の基礎を固めたのは8代15世紀の蓮如です。世阿弥とか千利休とか雪舟といったような芸術家たち、思想家たちとの同時代者ですが、その蓮如が京都から本願寺教団の橋頭堡を求めて吉崎にやってきた。あそこは要害の地でもあり、交易の中心地でもありました。いろいろな人間が内外ともに入出りする、そういう戦略的な重要地点があつた吉崎です。私もそこには何度も行っておりますけれども、その吉崎の地から眺める落日の光景もまた素晴らしい。蓮如上人の御文を読みますと、「朝に念仏、夕べに念仏」と言っておられますが、恐らく夕べ念仏は落日を見ながらの念仏だったと思います。北陸一帯は浄土真宗の広がった地域です。浄土真宗が広がっていく背景に、この日本海の彼方に浄土ありという海上浄土観が重要な役割を果たしたのではないのでしょうか。

そして3番目は、やはり出雲崎の良寛であります。私はあの良寛さんの跡を、もう30年の昔から時々訪ねているのですが、やはりあそこから拝む落日の光景は、佐渡ヶ島と重なって非常に素晴らしいものがあります。良寛と言えば手毬歌ですね。あの手毬歌を何度も読んでいっているうちに、不思議に思ったことがあるのです。それは子供たちと出会って、手

毬について歌を歌っているうちに日が暮れたという話です。「霞立つ 長き春日を 子供らと 手まりつきつつ くらしつるかな」。子供が好きだった良寛。牧歌的な光景と受け取ってきたのですが、それにしても日が暮れるまで子供たちと手毬について歌を歌い続ける、「そんなことおまえできるか」と声がどこかから聞こえてきた。考えてみると、できっこありません。私はそんなことしたら30分ももたない。当時は忙しくなかったのだと言えれば言えるけれども、いくら時間があっても子供たちと日がな一日遊び暮らして日が暮れた、これは容易ならぬことだとだんだん思うようになったのです。

当時の子供たち、貧乏な子供。両親が別れている、あるいは片親になっている、生活できなくなって子守をしている貧乏な子供、病気をしている子供、心が歪んでいる子供、けんかばかりしている子供、そういう子供たちが集まってくるわけですね。そのような子供たちと一緒に遊んでいるんですね。それは30分や1時間、2時間ぐらいでは子供たちの表情は穏やかにならないでしょう。普通の表情を取り戻させるために、彼は日が暮れるまで一緒に遊び続けたと、ふと思ったとき、ああ、良寛という人はすごいなと思ったのです。

手毬歌という歌はそこまでのことを歌っているわけですが、良寛さんは同時に太平洋の彼方に沈む夕日についての歌もかなり作っているのです。これはあまり知られていないのですが、先ほどまでちょっと暗記しようと思って何度も読んできたのですが、しゃべっているうちにすっかり忘れてしまいました。だから申しませんが、いい歌です。「夕日まばゆき春の海原」だったかな。だから、子供たちと手毬をついて遊んでいるのも「長き春日」、春の季節です。そして、その同じ春の季節に日本海の彼方に沈んでいる落日をじっと見て詠んでいる歌・・・。

私はそのとき、あることがひらめきました。長い間子供たちと手毬をついて遊んでいる、子供たちの顔が当然平静な普通の顔をするようになってきて、ようやく落日の時刻が来る。彼は子供たち全員を連れて海辺に行ったと思います。あの手毬歌の後は子供たちと一緒に海辺に立って落日を見ていたに違いない、そう思うようになりました。そういう話がまだまだたくさんあるに違いないと、だんだん思うようになったのです。

4. 越の国全体が享受していた日本海の精神的な価値

実は今、主に親鸞・蓮如という浄土真宗の信仰と、その信仰に基づく自然観についてお話をしてまいりましたが、もう一つ申し上げなければならないのは、禅、道元のことです。実は能登半島の門前町という所に、私は20年ほど前、初めて参りました。あそこ

は総持寺という永平寺と並ぶ禅の修行道場が立てられていた所であります。後に災害に遭って、総持寺の本体は関東の鶴見に移されてしまい、今、あそこは祖院として文化財のごとく保存されているにすぎないのですが、もちろん修行道場としての機能は果たしています。2代3代の瑩山禅師・峨山禅師が、能登半島門前町に建てられた総持寺を作り上げられた方々であります。

実際に行って私が思ったのは、総持寺祖院のすぐ前がもう海です。だから、あそこで修行した方々というのは海を前にして瞑想に入った。永平寺が山の禅であるとすれば、あの門前町の祖院で修行していたお坊さん方、禅僧方は海の禅、そういう世界で生きてお



られたに違いない。ちょうど、立山に山中浄土を思い描くと同時に、海上の彼方に浄土を思い描いていた親鸞や蓮如、それに対するに禅の世界では山の禅、海の禅ということが大きな意味・役割を持っていたのではないのかと、だんだん思うようになってきたのです。

そう思いましたときため息が出ました。この偶然はとね。越前・越中・越後、この三つの地域に分かれたのは天智・天武

のころだという説がありますが、元は全体が越の国です。その越の国全体が享受していた日本海の精神的な価値というものを、全体として捉えることがこれから必要なのではないのかと思います。どうでしょう、福井・石川・富山、あるいは新潟と言っているうちは、日本海全体が持っている精神的な価値、歴史文化的意味というものを全体として捉え損なうかもしれないと思うようになりました。例えば出雲崎から居多ヶ浜、そしてこの富山湾を經由して能登半島、海の禅、そして蓮如の吉崎、海上浄土の世界。これをずっとつないでみたときに日本海全体の文化的な意味が浮かび上がってくる。

そして、その長い沿岸の稜線部分をつなぐものは、もしかするとこの富山湾かもしれない。ここで富山が出てくるわけです。富山は山ですよね。新潟は潟。これは海かな、沼、浦、湖。新潟は海を象徴し、富山は何となしに山を象徴する。そして石川は川ですか、確かに、そういえばそういう特徴があるのですが、やはり潟と山と海を総合する中心的な地域を成しているのがこの富山県かもしれない。

私は以前四国のお遍路のつまみ食いをしていまして、一番先に行ったのが室戸岬です。あれは88番の24番目か25番目の札所ですが、そこから次の高知市桂浜まで行ったのです。その間、札所はほとんどない。海岸をずっと私は歩けばよかったですけれども、バスに乗って行ったのですが、かなりの距離です。あれはちょうど富山湾の湾曲した景観と非常によく似ている。素晴らしい太平洋をずっといつまでも眺められることができた。

それで、室戸岬には空海が洞窟に入って修行した場所というのがあるのですが、その真ん前に銅像が立っている。これは中岡慎太郎の銅像です。それから高知の桂浜に行きましたら、そこには坂本龍馬の銅像がありました。だから維新の革命を実現した志士たちは、太平洋の彼方を見て、ヨーロッパの思想・美術・文物というものを取り入れて、180度身を翻して革命を成就した。その自由民権運動というのも、こういう坂本龍馬などの働きの中から高知の地に生み出されていくわけであります。

同じような可能性といいますか希望というようなものを、やはりこの日本海、特に富山湾を前にして大海原の彼方を眺めやったとき、そういう光景が浮かび上がった。こちらは海上浄土だということですね。

5. 芭蕉の北陸路の旅

そのように考えたとき、この地域をずっと旅した人間がいるということが思い浮かびました。松尾芭蕉です。

松尾芭蕉というと『奥の細道』。『奥の細道』というと、江戸を発って日光を経て松島、松島から平泉、平泉から戻って出羽三山、最上川を下って酒田、この辺までですよ。しかし、その後の北陸路の旅が芭蕉にとって非常に重要な意味を持ったと私は思うようになったのです。私は東北出身、岩手県出身ですから、最初、そのイメージがなかなかわかなかったのです。平泉まで行って、彼は引き返している。「五月雨の 降残してや 光堂」「夏草や 兵どもが 夢の跡」。これは有名な俳句です。ところが、私の故郷はその平泉から歩いて半日です。なぜ芭蕉は花巻までやって来なかったのか。これは私の大なる不満でした。花巻までやって来れば、宮沢賢治の前に芭蕉の名句があそこで作られたかもしれない。こだわりました。

いろいろな説があるのですね。「芭蕉隠密説」というのがあって、当時伊達藩でお家騒動があった。それを調べるために、弟子の曾良を連れていった。曾良は大金を持っていたのです。これは史料的に明らかにされています。幕府のさる方面からお金をもらって、隠密

の仕事さをさりげなくやったのではないのかという説。そうすると、平泉が伊達藩の最北限で、その後は南部藩なのです。南部藩に行く必要がなかった、従って花巻に行かなかったという説があります。どうですかね、私の説はそうではないのです。

芭蕉がこの『奥の細道』の旅に出た目的は、いろいろあったでしょうけれども、その一つは、見たことのない日本海に出て、日本海から眺める落日の光景、これが彼の目標の一つだったのではないのかというのが私の今の推理です。同時に日本海の落日の美しい季節はいつかという問題もありまして、これはまたいろいろ説があります。やはり旧暦8月だという。それで花巻まで行っていると、その季節に間に合わない。それで引き返して、山寺に行って「岩にしみいる 蟬の声」を作って、それで出羽三山へ登って、最上川を下って酒田に。

その酒田で詠んだ句が落日の光景です。これは芭蕉の俳句の中で、あるいは『奥の細道』の中でも傑作中の傑作だと私は思いますけれども、人はあまり取り上げない。教科書に取り上げない。「暑き日を 海にいれたり 最上川」。「暑き日」は夏の暑い太陽。真っ赤にかっかど燃えている太陽がすうーっと沈んでいく。最上川というのは速いのです。「五月雨をあつめてはやし 最上川」、こちらの方は有名なのですが、それほど速い。河口に立ったとき、最上川の川の流れの速さに私も驚きました。その日本海に流れ入る最上川の流れに押されるように、あるいはそれと同調するように、夏の暑い太陽が水平線の彼方に沈んでいく。こういう光景でしょう。これは大きな俳句です。芭蕉は日本海の落日を見たかったのだと、これを見てそう思いました。

その後、もう10年ぐらい前ですか、ある仕事でその酒田に行って、夏の落日を見ようと思っただら、曇っていて見るできませんでした。しかし、目をつぶると瞼の裏に赫耀（かくやく）と輝いた落日の姿が日本海の彼方に沈んでいくのが見えたのです。見えるような気がしました。芭蕉もやはり、日本海に沈む落日に並々ならぬ関心を持っていたということが分かります。それでずっと北陸路を辿っていくわけです。

直江津から恐らくこの富山に入るところ、秋口になります。ここでもう一句、落日の光景を作っています。落日の光景を芭蕉は見たくて、それを『奥の細道』の後半の部分の重要な課題にしていたのではないかとだんだん思うようになったのです。親鸞・蓮如・道元・良寛、そういう人々が日本海に抱いたイメージ、憧れの気持ちというものを、芭蕉も同じように継承していたということですね。しかも、そこにもう一つの暗号のような問題が出てくるのであります。

それはご承知のように、親鸞は流されて自分はもう正式な僧侶ではない、僧侶ではないけれども信仰はちゃんと持っている、だから単なる俗人でもない、つまり「非僧非俗」という言葉を使っています。自分は単なる僧ではない、しかし単純な俗人でもない。「僧に非ず、俗に非ず」と、こう言ったわけです。実はそれと全く同じようなことを芭蕉も言っているのです。芭蕉の有名な『野ざらし紀行』という旅日記がありますが、これは江戸から富士川を渡って伊勢にお参りをして、それから京都の方に行く旅であります。その最初のところにこういう言葉が出てきます。自分は「僧に似て塵あり」。自分は坊さんの格好をして旅をしている。芭蕉という人は絶えず僧侶の姿をして諸国を回っております。日常生活をするときも坊さんの格好であります。しかし、「僧に似て塵あり」で煩惱をたくさん持っている。では俗人かという、「俗にして髪なし」と言っている。俗人にはあるけれども、せめて頭だけは剃っている。単純な僧ではない、しかし単純な俗人でもない、こう言っているわけですね。これは『野ざらし紀行』の中にはっきりとそういう言葉で出てくる。これも親鸞の言っている非僧非俗と全く同じではないかと思えます。

同じように良寛が「自分は沙門に非ず、俗人に非ず」と、こう言っています。良寛も曹洞宗、禅の門に入った男です。しかしながら、和歌の道は手放さなかった。ちょうど芭蕉も出家の風体はしているけれども、俳諧の道は捨てなかった。だから信仰と芸術、美と宗教、これを両方とも手放さずに生きようとした。これは日本人の生き方の理想形ではないかと私は思っているのです。俗人のままではやはり物足りない。それでは芸術の一本道の世界にのめり込んでいくかという、それだけでも満足できない。その二つの道の間を行ったり来たりするところに、人間の成熟した豊かな深い意味が宿っているのだという思想です。

これはもしかすると万葉の時代からずっと日本人の心の底に流れ続けている思想かもしれないのです。私も 80 を過ぎましたから、そろそろそういう境地にいたいと思うのですが、なかなか彼らの境涯に近づくことはできない。しかしやはり「僧に非ず、俗に非ず」に惹かれますね。芸術の世界を手放さずに、しかし、どこか世俗と違う生き方に憧れる。

そういう点では日本人の原型を示す人物が、私はもう一人が、これに付け加えて西行だったといたい。そして親鸞・芭蕉・良寛。そのうちの少なくとも親鸞・芭蕉・良寛が日本海で一時期、あるいは終生その生活を続けて、日本海に沈む落日によって精神世界を豊かにすることができた、そういう人間たちだったということに気づく。そのとき、同時に

日本海文化の持っている奥深さのようなものにも、気付かされるのであります。

6. 「夕焼け小焼け」に歌い込まれた仏教の考え方

もう 20 年ぐらい前ですが、日韓フォーラムという国際会議が東京で開かれました。現在もこれは続いているのです。第 1 回目、韓国と日本の両方のいろいろな分野の研究者が集まって、共同研究・共同発表をする、そういう会でした。私はそのとき京都にいましたが、「おまえも宗教のことについて何か語れよ」ということで出てまいりました。その内容については、もう時間もありませんので省略いたしますが、私の発表に対してコメントをしてくださった方は韓国の仏教学者でした。私より相当の先輩で、韓国を代表する仏教学者でございましたが、会が終わって懇親会になった。懇親会の席上ワインを飲みながら雑談をしていましたら、その方が突然、「自分は本当に日本人がうらやましい。自分は半生、韓国で仏教の研究をしてきたけれども、韓国はご承知のように儒教社会であり、仏教はその宗派が存在しないわけではないけれども、基本的に韓国社会というのは儒教社会なのだ。仏教学を研究した人間として非常に寂しい思いをしてきた。とりわけ日本にやって来ると、日本の方々には心の奥底までその仏教の影響を受けて生活をされているということに非常にうらやましい感情を持ち続けてきた」とふとおっしゃいました。

しかしそのとき私は、それは違うよと思った。20 年前ですから、「日本人は仏教を文字の上で思想の面で受け入れたかもしれないけれども、生活の隅々まで仏教の信仰を受け入れたとはとても思えません」と反論したのです。われわれの同世代というのはほとんど無神論者ですから、「汝の宗教何ぞや」と聞かれて「無宗教」と答える。今でもそうですよ。そういう人間が、あるいは人間たちが、われわれの同世代にとっても多い。仏教の考え方に生活の隅々にまで影響されているなどとは思えませんと言ったのです。そうしたら、その方は「あなた方は『夕焼け小焼け』って童謡を歌うでしょう。あの歌には仏教の考え方が、そのすべてが歌い込まれています」と言われたのです。びっくりしましたね。思いもしなかったことで、誰から言われたこともない、どんな書物で読んだこともない。

もうここでは歌いませんけど、「夕焼け小焼けで日が暮れて 山のお寺の鐘がなる おてつないで みなかえろう からすといっしょに かえりましょう」。ああと思いましたね。「夕焼け小焼けで日が暮れて、その落日の光景を見て感動しない日本人がいますか」と、こう言うのです。落日を問われて、自分のある時代のある場所における経験を感動の面持ちで語る人がほとんどです。「山のお寺の鐘がなる」、日本の仏教は山の仏教として大衆化

するわけですね。立山信仰がそうではありませんか。「おててつないで みなかえろう」、あれは夕刻になったらおうちに帰りなさいという子供に対するメッセージですが、あれは大人の心にも響くのです。

汝帰るべき所になぜ帰らないのか。立身出世のためにお金のためにあくせく働いて 60、70。はっと気が付いてわが心の底を見ると空洞化している。帰るべき所に帰れよ。昔から「帰去来之辞」という陶淵明の詩があります、あれですよ。「からすといっしょに かえりましょ」です。共生、共生とわれわれは今更のように言うておりますけれども、既にこの大正 10 年代に作られた「夕焼け小焼け」の歌にちゃんと歌い込まれている。参りましたね。そこまではその先生はおっしゃらなかったけれども、1 年たち 2 年たつうちに、なるほど「夕焼け小焼け」。日本列島いろいろな地域を旅しますと、夕方になるとその町のチャイムが鳴って、「夕焼け小焼け」を鳴らしている市町村が一番多いのだそうです。いかに日本人が落日の光景を愛し、それを聞いて育ってきたかということを示している。

ところがここ 20 年来、文科省が中心になってやった関東における小中学生の意識調査のデータがあるのです。その中に「夕日を見たことがあるか」という質問項目があるのです。関東の小中学生 3000 人のうち、「見たことがない」と答えた子供たちの数が何と 40% 超えている。それが 10 年以上続いている。「東京の子供たちは夕日を見たことがない、そんなばかなことがあるか」、私は思いましたよ。「いや、ビルが林立しているから、落日は隠れて見えないよ」、あるいは「そのころはほとんど塾に行っている」、そういう言葉が返ってくる。しかしいくらそう言っても、子供たちが夕日を見る機会がないなどとはとても思えない。実際にその時刻、東京のどこからでもビルの間からでもちゃんと落日が見えます。

私が考えましたのは、子供たちは見ることは見ている。しかし、それが記憶に残らない、忘れてしまっている。それで見ないと答えている。記憶されていないということは、落日を見て感動しないということなのではないか。感動しない子供たちが大量に発生しているということです。これは私の解釈ですが、ただ、その調査をした先生は、教育社会学の先生なのですが、私もよく存じている人です。「このパーセンテージは何も東京だけではない。日本列島至る所で 40% 以上の子供たちが落日を見たことがないと答えるでしょう」と、こう言うておられる。もしもそうだとすると、これは由々しきことである。私はこの世界に冠たる日本海側の落日光景というものを、もう少し日本人全体の共有財産にすべきではないのか、特にこれからの若い世代にそういう問題を教えていく、そういう機会を提供していくということが必要ではないのかということ強く感じている次第です。

日本列島人の意識の三層構造という問題で言いますと、その一番深層に横たわっているはずの古層の価値観・人間観・世界観というものを、今こそ発掘すべき、再評価すべきではないのか、そう思いますことを最後に申し上げて、私の話を終わらせていただきます。ご清聴、どうもありがとうございました。